慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代日本人の思想(松本芳夫著, 寧樂書房刊)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.3 (1959. 11) ,p.139(383)- 141(385)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19591100-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

古代日本人の思想（松本芳夫著　寧樂書房刊）

松本芳夫先生が古代史家として、わが國古代人の思想、觀念の研究に多大の努力をいたされたことは、ここに事新らしく述べるまでもない。その多年に亘る成果をあつめて、本書が成るに至つたことは、われわれ後學の者にとつては先生の業績を窺い、裨益されるところが大であると同時に、先生自身におかれては、まさに會心の慶事であろうと思われる。特に、先生が自ら序文の中に誌されたように、本書の第二章以下は一貫して書かれたものではなく、折にふれて別個に筆をとり、本誌をはじめ學界各誌を飾られた論文であるが、第一章は頁數の半ばを占め、最も意をそそがれた部分であることは明らかで、これが初めて發表されるものであることは、本書の價値をいやが上にも高めている。先生は默して語られていないけれども、これこそ先生の學位請求論文がはじめて一般の前に姿を現わしたものであつて、刮目を要するところであると同時に、われわれとしては心からなる祝意を表さざるを得ないのである。

本書の構成はこの第一章古代人の思想にはじまり、

第二章　古代人の民族觀念
第三章　古代人の歴史思想
第四章　古代人の戰爭觀念
第五章　古代人の自然觀念
第六章　古代人の海洋意識
第七章　古代人の他界觀念

の七つの章、すなわち論攷から成つている。そのうち最も古く書かれたものは第二章で、一九二一年本誌「史學」の創刊號に載せられた記念すべき論文であり、第七章が一九五一年の本誌上に發表されたものであるので、最も新しく、その間實に三十年を閲している。先生はこの長期に亘つて書かれた諸論文につき、序文の後段において「これによつてもわかるように、ものによつては三十年のへだたりがあるから、そうしてこの期間はわが國の未曾有の變動期であつたから、いまこれらの論文をまとめるにあたつて、その内容を多少補正したり、あるいは字句に修訂を加えなければならないものもあつた。しかし論旨においては、すこしも變つていない。」と述べておられる。この點は、實は特記すべきことであつて、活字にされたのは比較的新らしいことであつても、先生の古代思想に關する研究は、三十餘年前に一應完成を見ていたのであり、しかも確固たる獨自の史觀によつて裏付けられた、組識的研究であつた。加えて先生の史觀とメトーデは、その後の流行によつて少しも動搖することなく、そのまま今日においても基礎的なるものとして、燻し銀の如き、不變の光彩を放つているのである。次に少しくその内容について觸れてみよう。

第一章は第一「國土について」、第二「人民について」、第三「統治者について」、第四「統治について」、第五「國家について」の五小節から成つているが、第一の國土については、「國土が天神に歸屬するということは、後のいわゆる王土王民思想の神話的說明であるといつてよい。ここにわが神話におけるつよい政治的觀念がうかがわれるのであつて、國ゆずり神話も、天孫降臨物語も、その中心思想はすべてここにあるのである。」と論じ、第二の人民について、においては「古代における人民は、統治者にとつて概して愛すべきものとしてみられたのであり、人民みずからもそうみられることに何ら不滿はなかつたのである。」と斷じ、第三の統治者については「かくてわが古代の天皇は、神として至聖至上であつたけれども、しかしそれがために直接人民に接することがなく、代行政治の形において無力でさえあつたのである。他方においては、皇祖神がその子孫の繁榮をこいねがわれるように、神として人民の平安幸福に軫念されねばならず、そのことが天皇をしてみずからその專恣を抑制せしめたのである。」と注目すべき所說を述べておられる。次に第四の「統治について」にあつては、シナ思想との相違を强調されて、「わが天皇においては、善行は、かならずしも天皇の地位をたもつための義務であるのではなく、本來その人にそなわつた美德のおのずからなる發露であり、從つて愛民のごときも、人間の本來有する愛情の發露にほかならない。（中略）シナの天子の觀念が、天皇の觀念を强化したように統治理念としての愛民思想が、シナ思想の影響によつて强化されたことはいなめない。」と說き、第五の國家については「わが國民は一般に對外的につよい國家觀念、もしくは民族精神を有したのである。そうしてそういう意識の最も具象的にあらわれたのが、神國觀念であつた。」と云い、更に「從つて日本という意識にも、神國觀念との一脈のつながりがあつた。」と推論されている。さらに先生は本章の結語において、まず古代の思想を取扱う以上は、「それが主として貴族の思想であることは當然である」とされ、「當時の社會の支配階級をもつて國民の代表となすことは、最も妥當である」と說いて、ここに取扱つた古代人の思想が貴族のものであつたことを注意し、またそれを研究の對象としたゆえんを明かにされ、次いで儒教の影響を考察して、「かくのごとき天皇の神性は、古來の宗教的信仰にねざしたが故に、儒教の合理的精神も、この信仰を打破」し得なかつたのであると說明し、神國觀念が古代人の政治思想の核心をなし、それが現代にいたるまで、ながくわが民族精神を支配した。わが民族精神の長所も短所もこの神國觀念にあり、困難にあたつてそれに負うところも多かつたが、他面それのために國民の精神的開明がいちぢるしく阻害され、人道主義、合理主義、自由主義思想の發達が遲れるにいたつた。敗戰後の革新の時代を迎え、いかなる傳統の上に、新しい理念を育成すべきか、この解決がわれわれに與えられた課題であろう、と問題を今日に及ぼしておられる。

第二章には古代人の民族的觀念が採り上げられているが、先生はその特色を、古書においては民族的觀念の表現が一部を除いて微弱であると結論し、その理由を記錄が古くは歸化人によつて取扱われたこと、國内の異種族が早く馴化されたこと、日本人が平和民族であつたこと、神話傳說における政治的意圖と古書の編者の政策によるものと解された。第三章では古代人の歷史思想が俎上にのせられているが、古代人がこの世を神意によつて動くもの、現人神である天皇を中心として歷史が發展するという思想を有したこと、そこに「神ながら」の信仰があらわれたこと、また神の加護、天皇の「みいづ」によつて大事が成就すると說かれるが、それは「人間生活における超個人的偉力の作用をみとめるからであり」、「その偉力は民族の中心的生命から發動する」とおもわれたからで、ここにも天皇中心の思想が認められるとなし、古代人の歷史思想は、「神を中心として國家を、民族を、またこの世の動きをかんがえたところに特色がある」とされる。またこの所論に對する異論の生ずる點をも予め考慮され、それに對する回答も用意されている。

第四章は戰爭觀念を論じている。古代の戰爭は聖戰と見なされたが、それは宗教と密接な關係を持ち、神の啓示によつて行われたと信ぜられたからであり、同時に教化を伴つたからであるとされ、綏撫が主となり、あくまで歸服を肯わないものに武力が用いられたことを强調されている。第五章には、平和な自然に惠まれたわが古代人には自然との親密な關係が認められるが、その自然觀は微溫的であるのを免れなかつたことが說かれ、第六章では古代人がいかに海を恐れず、海に親しんだかについて述べられている。第七章は他界觀念の考察であつて、わが古代人にとつては高天原、黃泉國、常世國という三つの他界が、葦原中國という現實の世界と對立していると信ぜられたのであり、ここに彼等の世界觀の著るしい特色がみられたと結論されている。

さて縷々として紹介したところから、既に松本先生の史觀なり、研究態度なりは明らかに觀取されることと思われる。先生は古書、古文獻の記すところに精緻な研究と考察を加られると同時に、その示すところを、そのままの形において捕え、わが國古代人の思想の特質を明快に論ぜられたのである。この點は今日の我々の頭腦によつて理解しようとする最近の傾向とは顯著な對立を感ずる向きも多かろう。また關係諸科學の成果とその利用があまり著るしくない點も注意される。しかしすべての史學研究は先生のとられた立場から出發すべきであると思うのは筆者一人のみであろうか。古代史に志す者は先ず本書を繙き、先生の所說を十二分に理解した上で再出發すべきであると信ずる。筆者は先生の學恩を受けたが、少しく專門を異にしたものゆえ、果して誤りなき紹介をなし得たか否か、いささか心安からざるものがあるが、行文が極めて平易である點も特筆すべきであり、敢て江湖の一讀を願つて止まぬものである。（清水潤三）